



## 第2章

# KWM-2の誕生から 生産終了まで

KWM-2は、アマチュア無線の世界で著名なトランシーバです。KWM-2は、日進月歩のエレクトロニクスの世界で、1959年から約20年にわたり生産され続け、その間にさまざまな変遷がありました。

ここでは、KWM-2の誕生から生産終了までをダイジェストで紹介します。



### あらゆる場面で活躍する KWM-2

KWM-2は、現代のトランシーバの先駆けといえます。日進月歩のエレクトロニクスの世界で、その多くのKWM-2が、いまなお現役で活躍している事実は驚嘆に値するでしょう。

KWM-2は、いまから40年以上も前の1959年に、車はもちろん、船舶や航空機などでのモバイル運用を提唱するために、コリンズ社のメイン・ファクトリのある米国アイオワ州シーダーラピッズで産声を上げました。そのため、KWM-2には、表2-1に示すように、多くのアクセサリが用意されています。

車の12Vバッテリーで運用するための電源装置“MP-

1”をはじめ、車の24Vバッテリー用の“516E-2”，モバイル・マウントの“351Rシリーズ”，ノイズ・ブランカの“136B-2”，ノイズ・ブランカ用アンテナの“NTN”などです。さらには、DXペディション時に移動先へKWM-2を運搬するために便利なキャリング・ケース(サムソナイト製)も用意されています。

このように、固定運用，モバイル運用，そしてDXペディションなど，あらゆる場面での活用を想定し，十分に検討したうえで完成されたシステムであることがわかります。

写真2-1～写真2-4の各写真は，1964年当時のコリンズ社のカタログに掲載されたもので，写真2-1は，洪水か地震などの非常事態の起こった現場に駆けつけた車にKWM-2が搭載され，トランシーバが活躍して

見  
本



写真2-1  
災害現場で活躍する車に搭載  
されたKWM-2ライン



写真2-2 KWM-2でモービル運用

いる場面で、オペレータが通信を行っているようです。写真2-2は、KWM-2でモービル運用を行っているようで、KWM-2にはノイズ・ブランクがインストールされています。写真2-3は、固定局のようで、軍隊でKWM-2が使用されているところでしょう。このようにKWM-2は、軍用や商用としても信頼性の高いことを示しています。写真2-4は、固定局の構成例で、リニア・アンプ“30L-1”と外付けVFO“312B-5”という、このシリーズのフル・ラインナップでのセットアップで、見た目にもすっきりとした、当時のシャック・スタイルの最先端といえるでしょう。

いずれにしても、現代では常識でも、当時としては新しい多方面での運用方法として、コリンズ社は、モービル運用の普及促進を呼びかけていました。

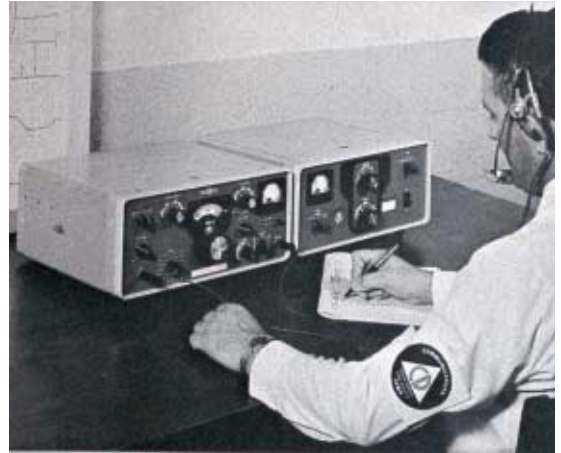


写真2-3 軍隊で使用されるKWM-2と30L-1

## KWM-2の特徴

KWM-2は、入力160WPEPのSSB/CWトランシーバですが、どんな特徴を持っているのでしょうか。KWM-2のカタログからピックアップしてみましょう。

PTO式VFOの採用で、群を抜く周波数の安定性と直線性

1:2.5のシェーブ・ファクタを持つメカニカル・フィルタの採用でクリーンな信号

ALC(Automatic Load Control)による平均パワー



写真2-4  
KWM-2をメインとしたフルラインナップ  
のアマチュア無線局